

【資 料】

## 新たな出発点となる断乳期の母親の変化

松 永 佳 子\*

### 【要 旨】

本研究は、子どもとの新たな関係を形成する必要がある断乳期に焦点をあてて、母親としてのアイデンティティや役割がどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とする。

本研究では、広島県近郊のA市にあるB総合病院の母乳相談室で断乳ケアを受けた母親11名と、同A市が行っている育児相談に来所した母親7名を研究対象とし、計537分のインタビューを行い、それらをテーマ単位で264単位に分類し分析した。

その結果、「2度目の分離」(67.0%)、「新たな母親としての出発」(22.7%)、「女から女らしく」(10.2%)という3つのカテゴリーが得られた。

2度目の分離がスムーズに経過するためには、母親自身が成長し、子育てが自然なことになる必要がある。母親は母親自身が成長することで「母親」になり、その結果、母親としての新たな役割を獲得し、さらにアイデンティティを確立することができていることが明らかになった。そのために、母親は自分自身と向き合う必要があり、そのような場を提供することが望まれる。

【キーワード】断乳、役割、アイデンティティ

### はじめに

“ケア”とは、人の面倒をみるという行為の次元と、他者に関心を持つという心理の次元がある(岡本, 1999)。子育ては、その両者をかねそなえていると考えられる。ケアの精神は、相手の成長を助けることによって自分自身の自己実現を成し遂げていくものである(メイヤロフ, 1971)。“ケア”を子育てと置きかえるならば、子育てとは、本来自分が持っている人間性や感性が磨かれ、発揮される過程であると考えることができる。その過程は時には負担にも、試練にもつながる。したがって、母親たちは常に育児への肯定的、積極的感情と否定的、消極的感情を持ちあわせている(山本, 1997; 氏家, 高濱, 1994)。

また、女性のライフスタイルが多様化している社会の中で、子育てをしている女性は、母親としての役割だけでは安心できずにいることも指摘されている。つまり、母親は子育てという他者を活かすことと、女性としての自己実現という自分を活かすことを統合していく必要が生じるのである。

これまで母親のアイデンティティに関する研究は、妊娠出産期もしくは、空の巣期を対象にしたものが多く、育児期の母親のアイデンティティに関わ

るものは少ない(鱧, 1997)。また、子どもの発達に及ぼす親の影響という視点での研究は多くなされているが、親の発達に及ぼす子どもの影響に関する研究も少ない(柏木, 1995)。

一般に、母親はケアをすることでケア役割を発達させ、自己の中で受容、統合していくことで母親としてのアイデンティティを形成していく(岡本, 1995)。著者が行った、断乳の時期の母親の思いに関する研究(松永, 2001)では、根ヶ山(1995)や安藤(1995)のいうように断乳は、母親にとって子どもとの身体的分離であり、子どもとの新たな関係を形成する出発点であることが明らかになった。その過程で母親の思いは常にゆらいでいた。これは新たな役割を取得することに関連していると考えられる。このことから、断乳という時期は、子育ての通過点ではあるが、1つの節目として、それまでのケア役割から新たなケア役割を取得しなければならない時期であると考えられる。

そこで、本研究では子どもとの新たな関係を形成する必要がある断乳の時期に焦点をあてて、母親のアイデンティティがどのように確立されるのか、母親の役割がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とする。

\* 日本赤十字広島看護大学

なお、本研究で役割とは、断乳することにより子どもへのもしくは、母親自身の認識が変化することによる行動や態度、アイデンティティとは、母親自身の認識を意味する言葉として使用する。また、断乳ケアとは、断乳するために行われる専門家による乳房マッサージを含む保健指導をいう。

## 研究方法

本研究は、断乳の時期の母親のアイデンティティや役割がどのように変化、確立していくのかを明らかにするために、面接から得られたデータを帰納的に分析する記述的研究を選択した。

### 1. 研究対象

平成13年12月から平成14年3月までに、広島県近郊のA市にあるB総合病院の母乳相談室で、断乳ケアを受けた母親11名と、同A市が行っている育児相談に来所した断乳ケアを受けていない母親7名である。対象者の特性を表1に示す。

### 2. データ収集方法

B総合病院の看護部長および育児相談を主催するA市には、事前に研究の趣旨を説明し研究参加に同意を得た。母乳相談室および育児相談に訪れた母親

には、ケアを受ける前や相談までの待ち時間、あるいは、ケア終了後や相談終了後に研究の趣旨を説明した。研究参加の同意を得られた母親に20分から40分程度、計537分間の半構成的なインタビューを実施した。

インタビューでは「断乳をしようと思ったきっかけを教えてください」、「断乳によって、お子さんとの関係で変わったと感じることはありますか」、「断乳によって、自分自身が変わったと感じることはありますか」と質問し、後は母親が自由に話せるように相槌をうち、母親の話に関連した質問を行った。対象者の同意が得られた場合はMDレコーダーに録音し、インタビュー終了後に逐語録を作成した。

### 3. データの分析方法

母親のインタビューの記述をKrippendorff (1980) の内容分析の技法に基づき18名のデータすべてをテーマ単位で内容分析した。ここでいうテーマとは、母親が断乳によって内面化していく自己の記述、および行動の変化の記述とし、そのいずれかを1単位とした。また、分析の妥当性を高めるために、母性看護学領域で修士課程を修了している専門家1名のスーパービジョンを受けた。

表1 対象者の背景

| 事例 | 年齢 | 職業   | 子どもの数 | 家族構成   | 栄養方法 | 断乳の時期 | 断乳のきっかけ          | 面接の時期<br>(断乳後) | データ収集の場所 |
|----|----|------|-------|--------|------|-------|------------------|----------------|----------|
| 1  | 26 | 医療事務 | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 10ヶ月  | 職場復帰             | 2ヶ月            | 病院       |
| 2  | 26 | 主婦   | 2     | 核家族    | 母乳栄養 | 3ヶ月   | 3ヶ月までと決めていた      | 1ヶ月            | 病院       |
| 3  | 34 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳6ヶ月 | 医師からの助言          | 3ヶ月            | 公民館      |
| 4  | 35 | 主婦   | 2     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳3ヶ月 | 子どもから自然に止めた      | 5ヶ月            | 公民館      |
| 5  | 29 | 看護婦  | 1     | 実親と同居  | 母乳栄養 | 1歳2ヶ月 | 職場復帰             | 1ヶ月            | 病院       |
| 6  | 27 | 主婦   | 1     | 義理親と同居 | 混合栄養 | 6ヶ月   | 自然に出なくなった        | 5ヶ月            | 公民館      |
| 7  | 36 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳2ヶ月 | 1年くらいで止めようと思っていた | 2ヶ月            | 病院       |
| 8  | 28 | 翻訳家  | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳3ヶ月 | 周りがやめていったから      | 1ヶ月            | 病院       |
| 9  | 25 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳2ヶ月 | レモンを乳頭にぬったアクシデント | 3ヶ月            | 公民館      |
| 10 | 30 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳    | 保健師からの助言         | 2ヶ月            | 病院       |
| 11 | 31 | 保母   | 3     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳    | 職場復帰             | 2ヶ月            | 病院       |
| 12 | 37 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 11ヶ月  | 周りがやめていったから      | 1ヶ月            | 病院       |
| 13 | 32 | 主婦   | 2     | 核家族    | 母乳栄養 | 1歳3ヶ月 | 第1子の断乳の時期に合わせたい  | 2ヶ月            | 病院       |
| 14 | 34 | 主婦   | 3     | 実親と同居  | 母乳栄養 | 1歳4ヶ月 | 乳腺炎のため           | 6ヶ月            | 公民館      |
| 15 | 35 | 主婦   | 1     | 義理親と同居 | 混合栄養 | 1歳3ヶ月 | 授乳が辛くなった         | 1ヶ月            | 公民館      |
| 16 | 36 | 公務員  | 3     | 核家族    | 母乳栄養 | 11ヶ月  | 職場復帰             | 4ヶ月            | 公民館      |
| 17 | 27 | 主婦   | 1     | 核家族    | 母乳栄養 | 1年    | 助産師のからの助言        | 2ヶ月            | 病院       |
| 18 | 33 | 会社員  | 2     | 義理親と同居 | 混合栄養 | 1年    | 職場復帰             | 1ヶ月            | 病院       |

#### 4. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究への協力は自由意志であり中断可能である旨を伝えた。また研究過程で得た個人情報の保護の厳守を約束し、研究成果の公表についての同意も得た。

### 結 果

断乳ケアを受けた母親と、断乳ケアを受けていない母親との間、初産婦と経産婦の間には、アイデンティティや役割の変化に違いが見られなかった。したがって、すべてのデータを分別せずに分析を実施した。

#### 1. 断乳をする母親の変化を構成するカテゴリー

母親が断乳によって内面化していく自己の記述、および行動の変化の記述をテーマ単位で264に区分し、それを内容により分類した結果、役割の変化として「2度目の分離」67.0%、アイデンティティの変化として「新たな母親としての出発」22.7%、「女から女らしく」10.2%という2つのカテゴリーが得られた。「2度目の分離」、「新たな母親としての出発」は表2と表3に示したサブカテゴリーから構成されていた。

#### 2. 2度目の分離

「2度目の分離」には表2に示した7つのサブカテゴリーがあり、それは1) 一心同体から個々へ、2) 子育てを自然に行う、3) 結局手間はかわらないの3つに大別できた。

##### 1) 一心同体から個々へ

一心同体から個々へとは、心身ともに密着していた状態から、授乳という行為がなくなることでそれぞれの個に分かれていくことを示す。

表2 2度目の分離に関するサブカテゴリー

| サブカテゴリー         | データの数 | 割合     |
|-----------------|-------|--------|
| 1) 一心同体から個々へ    | 116   | 65.5%  |
| (1)授乳を気にせず生活する  | 18    | 10.1%  |
| (2)授乳による負担が消失する | 49    | 27.7%  |
| (3)子どもを一人前として扱う | 21    | 11.9%  |
| (4)気軽に外出する      | 28    | 15.8%  |
| 2) 子育てを自然に行う    | 37    | 20.9%  |
| (1)子育てが生活の一部となる | 20    | 11.3%  |
| (2)子どもと共に成長する   | 17    | 9.6%   |
| 3) 結局手間はかわらない   | 24    | 13.6%  |
| 合 計             | 177   | 100.0% |

#### (1) 授乳を気にせず生活する

授乳を気にせず生活するとは、授乳をやめたことにより精神的に解放され、食事や服薬などが自由にできるようになったことを示す。

・「今までは(母乳に)全部移行すると思っていたから、食べ物とかすごく気を使っていて、甘いものを食べ過ぎないようにとかしていたり、薬も飲めないから自己管理をきちんとしていたというか、でもそれがいいから、わりとなんでも食べたりとか、それが良いのか悪いのか…」(事例17)

・「(子どもの) うんちの臭いとかも気になっていたんだけど、自分の食べ物のせいかなくて、気にしていたけどもう、気にしなくてよいと思うとすごく楽」(事例10)

#### (2) 授乳による負担が消失する

授乳による負担が消失するとは、授乳をやめたことにより夜間の睡眠が十分に取れるようになることを示す。

・「夜中起きるの、ほんと辛い、どうしてがんばれたのかって、不思議。今は夜眠れるから、昼間、余裕ができた」(事例12)

・「夜も3時間おきに起きて、(授乳を)やりおったんですよ。それがなくなったから身体が楽になった」(事例15)

#### (3) 子どもを一人前として扱う

子どもを一人前として扱うとは、母親の一部としてではなく「個」として子どもを認めたことにより子どもを「個」として扱うようになることを示す。

・「急に成長した気がして。べったりくっついていたときとは違う。大人じゃないけど、一人前に扱わないといけなと思いますね」(事例11)

表3 新たな母親としての出発に関するサブカテゴリー

| サブカテゴリー         | データの数 | 割合     |
|-----------------|-------|--------|
| 1) 母親プラスアルファ    | 27    | 45.0%  |
| (1)妻であるわたし      | 9     | 15.0%  |
| (2)子育てをする以外のわたし | 18    | 30.0%  |
| 2) 母親らしくから母親    | 33    | 55.0%  |
| (1)仕事をしていても母親   | 7     | 11.7%  |
| (2)ありのままの自分で母親  | 12    | 20.0%  |
| (3)子どもの成長の受容    | 9     | 15.0%  |
| (4)子どもから後押し     | 5     | 8.3%   |
| 合 計             | 60    | 100.0% |

- ・「こっちの話していることがわかるようになったみたいで、うかつなことはいえなくなりましたね」(事例15)

#### (4) 気軽に外出する

気軽に外出するとは、授乳をやめたことにより精神的にも身体的にも自分の時間が持ちやすくなったことを示す。

- ・「安心して子どもを預けられるから、ほら、おっぱいあげていると、自分も張って辛くなるから、出掛けるのもおっくうになるけど、でも、1人で買い物したりする気になれている」(事例4)
- ・「授乳室を探さなくてよいというだけで、気が楽。買い物が楽しくなった」(事例14)

### 2) 子育てを自然に行う

子育てを自然に行うとは、子育てが自分自身にとって特別なことではなく、自然なこととして行えるようになることを示す。

#### (1) 子育てが生活の一部になる

子育てが生活の一部になるとは、子育てが特別なことではなく、日常の中で当たり前のこととして行えるようになることを示す。

- ・「それは、子どもがいなかった時の自分、朝起きて、ご飯食べて仕事をしてという感じと同じ。自然というか、これをするのが当然、いちいち考えない、こう、単に息をしているような、別にがんばらなくて良いて感じて当たり前のことのようにできるようになる」(事例8)
- ・「今までは、赤ちゃんだっと思ってたから言ってもわからないと思って、叱ろうと迷った時、叱らなかったですね。でも、叱るところは叱らんといいかなと思って、そういうようになったような気がします」(事例16)

#### (2) 子どもと共に成長する

子どもと共に成長するとは、子どもに振り回されていると感じなくなり、母親自身も成長していることを示す。

- ・「そう、今までは、どうして、できないのって思っていたら、もしかしたら、できなくても当たり前って思えてきたのかも知れない。そしたら、子どもに支配されていたって感じだったのが、もしかしたら、身体が楽になったからかもしれないけど、うん、素直にできなくて当たり前って思えるようになった」(事例18)
- ・「これまでは、私がなんでも決めていたけれど。でも話せばわかると思うんです。だから、適当に

ハイハイって、勝手にことを運ばないというか、子どもの考えていることを一生懸命わかってもらうようになったかな」(事例1)

### 3) 結局手間はかわらない

結局手間はかわらないとは、母親が期待していた断乳後の予測と異なった現実を示す。

- ・「手がかかるのは変わらない、もっと離れていくかと思ったのに、逆に、大変です。おっぱいの威力を感じています」(事例14)
- ・「1歳で(おっぱいを)をやめたのは、やっぱり1歳って目標なんですよ。1歳になったら何でもじゃないけど、できるようになって、とにかく楽になるっていう印象があったんですね。イメージ。でも今はそんな事はないということが分かりました。(おっぱいを)飲めばすぐに寝るから全然、楽だったんですよ。」(事例10)

### 3. 新たな母親としての出発

「新たな母親としての出発」には表3に示した6つのサブカテゴリーがあり、それは1) 母親プラスアルファ、2) 母親らしくから母親の2つに大別できた。

#### 1) 母親プラスアルファ

母親プラスアルファとは、母親である自分以外の自分を認めることを示す。

##### (1) 妻であるわたし

妻であるわたしとは、授乳をしていた時期と異なり、夫をより身近に感じることを示す。

- ・「おっぱいをやめてから、(夫が)自分の出番もあるって思ったみたいで、それまではお前じゃなくてはだめだからって感じだったけど、(断乳をした)おかげで、夫と一緒にいる時間が長くなって、夫との距離が近くなったような気がしている」(事例5)
- ・「授乳をしているときは、Aちゃんのママって思っていて、だから夫のことを考えてあげられなかったというか、次の子のこととかもね、正直、考えられなかったけど。だけど、今は、夫のことでもわかるというか、素直に考えられる」(事例8)

##### (2) 子育てをする以外のわたし

子育てをする以外のわたしとは、無我夢中で子育てをしてきたことをふっと振り返り、子育て以外のことを考えることができるようになったことを示す。

- ・「授乳を中心に1日が回っていたから。それに

比べると、ずっと、時間ができますよね。家事とかも後回しになっていただけ、今は余裕があるからできるし」(事例2)

・「母親じゃない自分も存在したいと思っている。今までもそう思っていたのかもしれないけど、断乳したらそれができそうになったような気持ちになる」(事例17)

## 2) 母親らしくから母親

母親らしくから母親とは、振舞うことで母親であったと感じていた状態から母親であることが自然になっていると感じていることを示す。

### (1) 仕事をしていても母親

仕事をしていても母親とは、仕事をしているがゆえにより母親であることを強く感じることを示す。

・「(仕事をしていても)それでも、母としてどうあるべきかを一番に考えるような気がする」(事例5)

・「時間的に密着できる時間が少なくなるから、その分、充実した時間を過ごしたい」(事例11)

### (2) ありのままの自分で母親

ありのままの自分で母親とは、こうしなければいけないという呪縛から解放され、子育てに自信が持てていることを示す。

・「周りの人に色々いわれても、断乳が成功したことで、最終的には自分が決めれば良いんだって思って、誰がなんといっても、私がこの子のこと一番わかっているわけだし、って思えるようになった」(事例7)

・「何がどうなるのも私の責任のような気がしていたんです。でも、そう簡単に大事には至らないということをわかってきた、慣れてきた、だから手を抜くこともできる。自信がどうかかわらないけど」(事例13)

・「子育ては誰でもできるし、でも自分の今までのすべてのものが伝わるのです。今までの自分が反映される。だから、やっぱり、その時だけっていうのは無理なんだと思う。そんなことを子どもの姿を見て思うのよ。おかげでどうすればいいのか、わかるようになったの。自信がついたのかな」(事例4)

### (3) 子どもの成長の受容

子どもの成長の受容とは、子ども自身の成長を素直に受け止めることを示す。

・「一人遊びができるようになって、それは断乳

のせいじゃないかもしれないけど、自分の意志がだいぶ出てきているし、主張するようになって、はじめは戸惑ったけど、やっぱりうれしいですね」(事例1)

・「私がいないと、この子はって思っていたんです。でも、おっぱいを止めたら、結構一人で遊べるし、主張も激しくなって、手がつけられないことがあるくらい。成長したんだって思います」(事例8)

### (4) 子どもからの後押し

子どもからの後押しとは、無我夢中だった子育てではほんの一瞬に過ぎず、自分自身のことを考えなければと感じることを示す。

・「子どもって、きっと、あっという間に大きくなって、いつか離れていくんだろうなって、自分が寂しくないように、自分の何かを探さないと、大袈裟かもしれないけど、何か、離れていく第一歩みたいな感じがしています」(事例16)

## 4. 女から女らしく

女から女らしくとは、生物としての女性から人間の女性を意識することを示す。

・「妊娠中、授乳中っていうのは一番女らしい時、女を全身で背負っている時期、特に、おなかの中に子どもを宿すとか、おっぱいをあげるとかって、女にしかできないでしょう。でも、その時が、女性らしさを失いがち、そういう時期ですよ」(事例4)

・「ほんと、今までは化粧しようとも思えなかった。でもね、化粧をして出かけないと恥ずかしいかもって、急に思い始めています」(事例7)

・「授乳中って余裕がなかったんですよ。時間が取られるし、自分のことにあまりかまえなかったんですけど、気を抜いていた所に、気を使わないといけないという気持ちができきましたね」(事例15)

## 考 察

### 1. 役割の変化

多くの母親は、『2度目の分離』のサブカテゴリにみられる「一心同体から個々へ」という身体的、精神的分離を経験している。つまり、母親は断乳により、授乳による心身の密着状態から、ある程度、子どもとの距離を保つことができるようになる。その一方で、母親が想像していた断乳後の状態ではない、すなわち、母親が「子どもが自分から離れない」

状態であると認識することで、「結局手間はかわらない」と必ずしも、その距離が適切に保てないこともある。この要因は、母親が、日々の育児の積み重ねから子どもの生理の規則性、変化への適応性、情緒の安定性、活動の活発さなどを通して個々の子どもの気質を知る (Symonds, Chess & Niles, 1964) ことが十分にできていなかったことや、子ども自身の発達、行動特徴によるものと考えられる。このように、『2度目の分離』は子どもの行動特徴や発達によって影響され、親の発達プロセスと子どもの発達プロセスは共発達の的であるといえる (Belsky, 1984)。

『2度目の分離』がスムーズに経過するためには、「一心同体から個々」に分離をし、さらに「子育てを自然に行う」必要がある。断乳の時期は、Galinsky (1987) による親性の6つの発達段階で、第2段階の「養育期」にあたる。母親は、断乳という『2度目の分離』を経験することで、世話や愛情をいつ、いかに与えるべきかを学習しながら子どもとの関係を形成し、母親としての役割を取得していったと考えられた。

『2度目の分離』に関するサブカテゴリーの中の「子育てが生活の一部になる」とは、母親が子育てを日常のこととして受け止めていることを意味している。逆に言えば、それまでは、振る舞うことや、母親ということを意識しながら母親を演じていたともいえる。しかし、断乳により子どもとの距離がついたことで、もしくは距離が保てるという自信がついたことで母親としての役割を取得し、「母親」になっていったといえる。

## 2. アイデンティティの変化

母親のアイデンティティは、「母親」と呼ばれる社会的カテゴリーは同じであっても、それに付随する意味付けが変化していく (三井, 2000)。本研究の対象者である母親も、断乳をすることで「母親」としてのアイデンティティが変化していったと考えられた。

第1の特徴として母親は、女としてのアイデンティティを再認識していた。『女から女らしく』というカテゴリーに見られるように、それまでの妊娠、分娩、育児、その中でも特に、授乳という生物学的な女性としての機能を最大限活用していた段階から、人間として、もしくはジェンダーとしての女性を自らの中に再認識するのである。このようなアイデンティティの変化には、「母親プラスアルファ」の中の「妻であるわたし」というサブカテゴリーに

みられるように、妻としての存在を意識すること、夫への父親としての役割の期待、さらには夫自身の変化等にも影響を受けているであろう。すなわち、子どもとの関係が中心となっていた授乳をしながらの子育ての段階を経て、子どもとの関係だけでなく、夫や自分自身のことにも目が向けられるようになったのである。これは子どもとの物理的距離を保てるようになったことが影響していると考えられる。同時に母親が子どもに対して、いつ、どのように世話をし、どのような時には距離をおけるかということ学習した結果ともいえるのではないかと考えられる。

第2の特徴として母親は、「新たな母親」として自分自身を確立、アイデンティファイしていた。母親は断乳の過程で自分自身を知るようになる (河野, 1998; 岡本, 1999)。それまで母親は、育児書や周りの母親の言動に影響を受けていることが多い。しかし、断乳が成功することで母親は、『新たな母親としての出発』のサブカテゴリーにある、「ありのままの自分で母親」にみるように、育児書や周りの母親の言動を自分の中に取り込み、取捨選択できるようになっていた。さらに母親は、「子どもの成長の受容」をすることで子どもに選択権を委譲していた。Allport (1968) は親のコンピテンスを、①問題解決の能力、②見通しを持つこと、③感情の調節、④活力であると述べている。この「ありのままの自分で母親」になることで子どもを分かっているのは自分であるという自信が持てることにより、子育てをする上でのコンピテンスを高めていくことで母親としてのアイデンティティを確立していったと考えられる。

このように、母親は、自分自身に問い掛けることで母親としてのアイデンティティを確かなものにしていき、同時に子どもとの新たな関係を築いていったと思われた。

## 本研究の限界

本研究の対象者は、断乳を経験した母親18名であり、いずれの対象者も断乳をしてから1ヶ月以上が経過した時点での面接によりデータを収集している。したがって、断乳のきっかけや、その方法により母親の変化に大きな違いがなかったと思われる。しかし、断乳による変化を記述するためには、母親の振り返りだけでなく、断乳をする前とその後の比較をする必要であったと考える。今後、データ収集方法、および分析方法をさらに精選する必要があると考える。

## 看護への示唆

### 振り返るきっかけの提供

Clark. & Mishler (1992) は社会構成主義 (社会的構築主義) をベースにし、それを臨床の場で活用するための方法、特に、セラピストと対象者とは、一緒に水平な水準でセラピーを進めていく必要性、および、対象者を一番知っているのは、セラピストではなく対象者自身であるという前提のもとで、臨床の場における対象者の語りの重要性を説いている。さらにClark & Mishler (1992) によれば対象の語りに参与することの臨床的な重要性は、それが臨床的介入となり対象を変えることにあるという。

母親は1人あたり20分から40分という短いインタビューをされることによって、母親自身にとって断乳という出来事を意図的に振り返る必要に迫られた。しかし、このインタビューにより母親は振り返りができることで自分自身を見つめ直すことができたと考えることができる。育児をする母親は日々の生活に追われともすると自分自身を見失ってしまう現代社会において、「語り」の場を提供する必要性があるのではないだろうか。

## 結 論

本研究では断乳の時期に母親がどのように新たなアイデンティティと役割を確立していくのかに焦点を当てて帰納的に分析した。

母親は断乳により子どもと常に密着した状態からある程度の距離を持つという関係性の変化を経験する。この関係性の変化により、母親は子どもとの新たな関係を形成し、その過程で母親自身も成長していったと考えられた。この母親の成長により、母親は自然な状態で「母親」となるという役割を取得していた。すなわち、母親として自立することができていた。

このように母親として自立することで、子どもに選択権を委譲する、また子どもをわかっているのは自分である、という自信が持てることにより、母親としてのコンピテンスを高めて、それが母親以外の自分というアイデンティティを生み、さらに母親以外の自分をもつことで新たな母親としてのアイデンティティが形成されることが明らかになった。

断乳は子育ての通過点に過ぎず、母親は常に子どもとの関係においてさまざまな問題を抱えている。しかし断乳の時期に子どもと向き合い、自分自身を見つめ直すことで「新たな母親」として出発できている。そのために母親たちが振り返りをできる環境

を提供していくことが望まれる。

## 謝 辞

本研究にご協力いただきましたお母様、ならびにフィールドを提供して下さいましたA市役所、B総合病院の皆様にご感謝いたします。なお、本研究は日本赤十字広島看護大学の共同研究費の助成を受けて行いました。

## 文 献

- Allport, W. (1961)/今田恵監訳 (1968). 人格心理学. 東京, 誠信書房.
- 安藤明人 (1995). 子別れと集団. 根ヶ山光一, 鈴木晶夫, 子別れの心理学 (pp. 165-182). 東京, 福村出版.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Clark, J. A. & Mishler, A. (1992). To patients' stories: reframing the clinical task. *Sociology of Health and Illness*, 14 (3), 344-372.
- Galinsky, E. (1987). The six stages of parenthood, The influence of family climate on the development of character structure (A panel discussion). *American Journal of Psychoanalysis*, 24(2), 195-209.
- 柏木恵子 (1995). 親の発達心理学. 東京, 岩波出版.
- 河野利津子 (1998). 親役割に関する研究 (IV) 親であること (parenthood) と成人としての発達. *比治山女子短期大学紀要*, 33, 1-13.
- Krippendorff, K. (1980)/三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明 (1989). メッセージ分析の技法「内容分析への招待」. 東京, 勁草書房.
- 松永佳子 (2001). 断乳を受け入れるまでの母親のゆらぎ. *日本助産学会誌*, 16 (1), 48-57.
- ミルトン・メイヤロフ/田村真 (1971). ケアの本質. 東京, ゆみる出版.
- 三井宏隆 (2000). レクチャー「社会心理学」、セルフ・アイデンティティ・インタラクション. 東京, 垣内出版.
- 根ヶ山光一 (1995). 子育てと子別れ. 根ヶ山光一, 鈴木晶夫編. 子別れの心理学 (pp. 12-30). 東京, 福村出版.
- 岡本祐子 (1995). 女性のためのライフサイクル心理学 (pp. 12-21) 東京, 福村出版.
- 岡本祐子 (1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ. 京都, 北大路書房.
- 鎌幹八郎 (1997). 家族とアイデンティティに関する研究. *アイデンティティの研究の展望IV* (pp. 170-175). 京都, カナニシヤ出版.
- 氏家達夫, 高濱裕子 (1994). 3人の母親 その母親についての追跡的研究. *発達心理学*, 5, 123-135.
- 山本真理子 (1997). 現代の若い母親たち. 東京, 新曜社.

# How Mother Change and Make a New Start in the Last Stage of Breastfeeding

Yoshiko MATSUNAGA\*

## Abstract:

As is well known, it is necessary to form a new mother-child relationship in the last stage of breastfeeding. This paper shows how mothers' maternal identity and role change during this stage.

We interviewed 11 mothers in a municipal hospital in Hiroshima who came to try to stop breastfeeding and 7 mothers who sought consultation at a municipal child care guidance clinic in Hiroshima. The time for the interviews amounted to 537 minutes. Based on their contents, the interviews were classified into 264 context units and then analyzed. The units were roughly divided into 3 categories: 1) making the second separation (67.0%), 2) starting as a new mother (22.7%), 3) becoming more feminine(10.2%).

The study reveals that mothers need mature themselves and become natural state of bringing up a child for the second separation. Consequently mothers establish new mother's identity. Therefore, in the stage, we need provide for the place of mothers by facing themselves.

## Key words:

The last stage of breastfeeding; role; identity

---

\* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing